

特別企画

池田SGI会長の

ブルガリア語版

対談集セット「序文」

東洋哲学研究所の創立者・池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長の対談集のブルガリア語版が3冊セットで発刊され、2008年11月、国立ソフィア大学で出版記念会が開催された。このセットに、同大学のヴァシヤ・ヴェリノヴァ氏が寄せた「序文」を紹介する。

発刊されたのは、歴史家A・トインビー博士との『二十一世紀への対話』、ローマクラブ創立者のA・ペッチェイ博士との『二十一世紀への警鐘』、ソフィア大学教授のA・ジュロヴァ博士との『美しき獅子の魂』（単行本は2000年のブルガリア最優秀出版物）の3冊。

ヴェリノヴァ氏は中世スラヴ文学の研究者で、ソフィア大学「イワン・ドゥイチエフ記念スラヴ・ビザンツ研究所」の副所長。序文では、「対談」という形式が異文化同士を「互いにより豊かにする」意義を述べるとともに、3冊の対談集は、大きな岐路に立つ二十一世紀の人類が「生への選択」を果たすための指標と責任の自覚を与えてくれると述べている。



対談集セット。下は右からペッチェイ対談、トインビー対談、ジュロヴァ対談。中央上はセットの外箱。世界の要人との語らいの写真があしらわれている

精神、智慧、そして経験の力について

——池田大作氏の3冊の対談集に寄せて

ヴァシヤ・ヴェリノヴァ

二宮由美 訳

ある書物が「長きにわたる生命」をもつのは、その書に対して読者が関わっていくからです。そして書物が再版されるということは、その本に対する読者の「長きにわたる関心」を示しています。今回、池田大作氏の三冊の対談集が新たに一セットとして再版されました。これによって、セット全体として、矛盾と問題をもつ二十一世紀へのメッセージとなるとともに、三冊のそれぞれが、そのメッセージの不可分の一部となったのです。

これらの対談集がブルガリア語で出版された時期は、まちまちです。すなわち『生への選択』（アーノルド・トインビーとの対談、邦題『二十一世紀への

対話』）は一九九五年、『手遅れにならないために』（アウレリオ・ペッチェイとの対談。邦題『二十一世紀への警鐘』）は九七年、そして『獅子の魂』（アクシニア・ジュロヴァとの対談。邦題『美しき獅子の魂』）は二〇〇〇年でした。それにもかかわらず、これらが今回、一緒に発刊されたのは、それぞれの書で提示された問題、思想、警鐘そして洞察が共通しているからです。

「東」と「西」

——互いを豊かにする出会い

この三冊および著者たちは「二十世紀の最後の

十年」の知的ニーズにどう応えたのでしょうか。それを理解するために、また、その偉大な貢献と、今なおもつ建設的な力を評価するために、読者の一助になるかと思ひ、これらの書物の歴史と著者について簡潔に述べてみましょう。

池田大作氏は日本の知識人であり、人道主義者、宗教者であり、日本で最大の影響力をもつ文化・宗教・社会組織のひとつ創価学会の名誉会長です。氏は一九七〇年代から、政治、経済、文化、科学そして芸術の分野における重要人物と一連の対談を開始しました。それらは、社会と政治、文化と文化人類学に関わる世界的問題についての対話であり、対談相手には、ヘンリー・キッシンジャーやミハイル・ゴルバチョフのような政治家、フィデル・カストロのような英傑、ライナス・ポーリング、アナトリー・ログノフ、アーノルド・トインビー、チャンドラ・ウィックラマシンゲのような科学者、アンドレ・マルローやチンギス・アイトマートフのような作家、そして、ブライアン・

ウィルソンやルネ・ユイグのような学者たちです。この世界的なエリートの中に、一人のブルガリア人、すなわちアクシニア・ジュロヴァ博士の名前が明記されていることは私たちの榮譽です。同博士は歴史、文化そして現代芸術の分野において、世界的に著名な学者です。

これらの対談の目的は、多様な視点を提示し、全人類が未来に発展するための方向性を、通常見られない手法で提案することです。彼らは、影響力のある、その道の權威として広く認められており、その意見は、世界全体の発展に資する確固たる見解として認められています。

文学的・哲学的な対話という形式は、古代から東洋でも西洋でもよく知られています。孔子の教えは対話形式によつて展開されていますし、プラトンの対話篇は、ヨーロッパ文化の土台である古代ギリシャ文化の中核です。対話形式は、ルネッサンス期には、やや廃れたものの、古典主義と啓蒙主義の時代に、メッセージを交換する高度な文

学スタイルとして生まれ変わりました。ところが現代では、知的・文学的には、ほとんど関心をもたれていないかのようです。

おそらく、このような理由によって、池田大作氏の一連の対談集が現代の読者にとって努力を要するものとなっているのでしょう。読者は、そこで二つのタイプの思考法が触れ合っているのを感じます。ひとつは自己に沈潜する東洋的思考であり、知的探求においてさえ詩的形式をとるほど隠喩性に富むものです。もうひとつは実用主義的で合理的な西洋的思考で、時に強調された表現を用います。これらの対談集においては、こうした異なるタイプの文化伝統が互いに影響し合って、互いにより豊かになり、現代的で鋭い見識をもつ文学的・哲学的対話の独特な精神的オーラを醸し出しています。

現代人は、二十一世紀初頭のあの出来事（9・11）を経験し、サミュエル・ハンチントン氏が文明の衝突について書いた極端な著作（『文明の衝突』）

に深く影響されていますから、異なる文化と文化を主に「対立」という視点から見えています。そういう人にとって、この対談集は、「寛容」と「認め合い」という新しい視野を開いてくれます。それは、『他者』を理解するための確かな基盤となるものであり、その結果、『他者』の目を通して自分自身を理解するための基盤ともなるのです。

冷戦時代から「世界の一体化」を展望

三冊の対談集は、五年間（一九九五年から二〇〇〇年）という比較的短い間に、ブルガリア語で次々に出版されました。原書の出版は、トインビー博士との対談は七十六年（博士の逝去から一年後）で、ペッチェイ氏との対談は八四年（これも氏の逝去後）であり、冷戦時代という一番新しいヨーロッパ史に私たちを連れ戻してくれます。この事実は軽視されるべきではありません。なぜなら、その時代についての信頼できる証言として、最も批判的な読者でさえも、この二冊の本を評価するだろうか

からです。三番目の『獅子の魂』は、両著者が述べているように、二十年がかりで完成しました。二〇〇〇年に出版されましたが、なかには八九年の「変革」以前のブルガリアの現実を描写した箇所もあります。私は、ノスタルジックな回顧にひたるつもりはありません。ただ、多くの若者は当時のことを話に聞いたり、メディアの刊行物を通して知っているだけなので、この本が、我が国の歴史における重要な時期について貴重かつ公正な情報を彼らに提供してくれると考えるのです。このように三対談集は、年代的にも、それぞれの方法とテーマによっても、補完し合っています。

『生への選択』と名づけられた一冊目の対談集は、池田氏とトインビー博士とが編んだもので、現代の多くの事象に関する哲学的かつ文化人類学的な基礎、そして現代史についても私たちに教えてくれます。『手遅れにならないうちに』という二冊目の対談集では、池田氏とペッチェイ氏は、一冊目の対談集で言及されたさまざまなアイデア

に、具体性と実践的な方向性を付け加えています。さらに、イタリア人の著者（ペッチェイ氏）の自然環境保護の訴えと生物圏の未来への危惧は、池田氏によって強く支持されましたが、今日、いよいよ切実なものとなっています。三冊目の対談集は、主に文化的な伝統とそれを民族のアイデンティティとして保持することについて述べられています。私たちブルガリア人にとって『獅子の魂』というタイトルは特に強く心をとらえるものです。本書の中で池田氏とジュロヴァ氏は、グローバル化する世界で精神的に生き残るためには、文化と芸術そして民族の独自性がいかに重要であるかを強調しています。この対談集——譬喩的に（西洋と東洋とを結ぶ）シルクロードに見立てられています——が訴えているのは最も重要なメッセージのひとつです。なぜならそれは、バーチャル・リアリティー（仮想現実）、下劣なマスメディア、いたるところに浸透した市場原理に捕らえられてしまった現代世界から、「人間性と真実の価値」を救

い出そうという叫びだからです。

最初の二つの対談集、池田・トインビー対談と池田・ペッチェイ対談は、現代の地政学と文化、社会的・文化的諸問題について歴史的にアプローチしたいと思う分析的傾向の読者にとって、またとな貴重な情報源です。二つの対談は、現代社会における知的可能性の精髓を示しました。すなわち、「一体化した世界」という概念を創出し、その幾分かは今、現実化しているのです。別の表現をすれば、私たちが崇高な目標と人道的な動機とともに考えていたグローバル化のさまざまな側面について、この二対談集は、多くの疑念と不安をもって描き出しているのです。

トインビー対談

——「精神変革」の可能性を探る

池田・トインビー対談では、第二部において、国際政治の諸問題が深く分析されています。ここでは国民国家を放棄^レする必要が論じられ、経

済成長と戦争との絡み合いが分析されています。また未来の地球共同体のモデルとして、西欧型民主主義の利点が指摘されています。両者は、(発刊された七六年当時)理論上のものにすぎないとしながらも、世界連邦の理念を提示するとともに、距離を縮める^レことで相互理解を助ける科学技術革命について強調しています。また両者は、世界が一体化に到達するまでの道筋について、ヨーロッパ、日本、中国の歴史の実例に基づいて、興味深い推論を提示しています。

トインビー氏の百科全書的な^{こうはん}広汎な知識と、歴史的・文化的決定論を知る人にとって、このアプローチは驚きではありません。氏は、世界的に著名なイギリス人歴史家であり、社会活動家、社会学者、そして王立国際問題研究所理事を三十年(一九二五～五五年)にわたり務めた外交の専門家でもあります。二度の世界大戦の後で平和交渉に加わり、その結果、氏は、ヨーロッパの最新の歴史に関して、内実の豊かな知識を得ました。古代ギリ

シヤおよびザンツ史を専門とする学者として出發したトインビー氏は、広大な知的地平線を自身の中に広げ、世界の文化・文明に関する深い学識を蓄えました。オスヴァルト・シュペングラーの思想に影響を受けたトインビー氏は、西洋文明が主権を得ることがほぼ自明であるとする世界史に對して、彼独自の史観をつくりあげました。氏の代表作である『歴史の研究』を、学界が字義どおりに受け入れることはありそうにありませんし、著者のいくつかの観點に對して読者が批判する可能性もあります。しかし、『歴史の研究』はすでにヨーロッパ文化史の一部となっており、彼の思想は、その（オピニオン・リーダーとしての）名望によって支えられつつ、ヨーロッパ大陸の發展に影響を与えています。

対談集『生への選択』は、現代的関心事でありながら、いまだ答えられていない、いくつかの問題を提起しています。おそらく最も深い思索と議論がなされているのは、現代社会における宗教の

位置について検討した第三部でしょう。正統な仏教徒であり、伝統主義者であり、ある意味では宗教改革者でもある池田大作氏は、宗教による人間形成に大きな力点を置き、それを通して、個人の精神革命がなされ、個々人を変革する結果として、全世界も変革されると言います。一方、より穩健な立場をとるトインビー博士は、現代人の必要な拠り所として、*「高等宗教」*について語っています。西洋において、テクノロジーの魅惑に取り囲まれた二十一世紀の世代が、このような考えを躊躇なく受け入れることは困難でしょう。「ひとつの宗教に基づいて、世界が統合される」という未来図は、ユートピアであり続けるでしょう。

しかしながら、ぜひとも指摘しておきたいのは、仏教教義はキリスト教文明の伝統からみれば、宗教というよりもむしろ哲学的・宗教的体験の体系化ですが、その中の幾つかの教えには重大な可能性が秘められているということです。精神的な自己完成、自然との一体化、人間の活動と自然法則

の調和といった思想は、懷疑的な社会においてさえ、格別の魅力をもっています。物質的繁栄が道徳的荒廃と結びついている先進国においては、とくにそうです。

科学と技術には限りない可能性があるという誤った確信によって、西洋的な合理主義は近年、より強固になっていますが、これは東洋の自然観や世界へのアプローチの仕方とは根本的に異なっています。おそらくそのために、池田大作氏——多くの弟子が尊敬を込めて「先生」と呼んでいます——が一貫して提唱している「内面的な（個人的な）人間革命」の理念を、留保なく受け入れることができないのでしょうか。個々人が精神的に発展する道を探る研究がなされるべきなのでしょうか、しかしその道は、それぞれの共同体に固有の精神的・文化的な通念と調和したものでなければなりません。

しかし、さらに重要な点があるのです。それはこの対談集で語られている「精神性、モラル、規

範の保持への努力」です。まさにそれによって私たちは人間的な存在となるのであり、この点において両著者は今日の人々と多くを共有しています。両者は、教訓的なトーンになるのは避けがたいと知りつつも、人類の未来への憂いを隠すことなく表明しています。人類は、科学技術や生物学の野放しの発展、そして宇宙にまで広がる危険のある軍備競争のただなかにあるのですから。

ペッチェイ対談——「科学技術の コントロールを」と警鐘

池田・トインビー対談で理論的に示された思想の数々は、次の対談集である池田・ペッチェイ対談で、より具体的に説明されました。イタリアの実業家であるアウレリオ・ペッチェイ氏は世界的に著名です。氏は、フィアット社やオリベッティ社などの会社を統率し、いくつかの非政府団体の設立に参加し、ブルガリア語訳もある『*The Human Quality*』（邦題『人類の使命』）の著者でもあ

ります。氏は六八年、スコットランド人の科学者、アレキサンダー・キング氏とともにローマ・クラブを立ち上げました（訳注…正式発足は七〇年）。ローマ・クラブ自体の定義によると、同クラブは「人類の未来は前もって、はっきりと定められているのではなく、一人一人の努力で人類生活の改善に貢献できるのだ」という信念をもった科学者、

エコノミスト、経済人、高等国際機関職員、各国指導者とその経験者で構成されています。ローマ・クラブは、『成長の限界』と名づけられた六八年の年刊報告書——対談集で何度も言及されているが——によって、一気に社会的注目を集めました。このレポートは七二年に一冊の本として出版され、三十以上もの言語に翻訳されました。これは、「世界の資源は有限であり、無制限に利用することはできないゆえに、エネルギー消費を削減しなければならない」と、西欧諸国の政府に知らしめた最初の提言でした。この文書は大変に有名な一方で、これはマルサス主義（訳注…人口増加に

よって食糧不足になるのは必然であるという主張）だというような厳しい批判にもさらされました。しかし、実際、レポートは真剣に受けとめられ、数十年にわたって西欧諸国に影響し続けてきたことが、池田・ペッチェイ対談によって明らかにされています。

『手遅れにならないうちに』と名づけられたこの対談集は、具体的な諸問題と、私たちが今日、グローバリゼーションと呼ぶところの世界の変革過程の基本的側面が考察されています。全三部を通して、国民国家という枠を克服するために何をすべきかが、理論的にだけでなく、実際的にも検討されています。ペッチェイ氏が、「グローバルに（世界的視野で）考え、ローカルに（地域に根差して）行動する」というキャッチフレーズを使用したのも、同書においてでした。このキャッチフレーズは今や、グローバリゼーションの理論家や活動家に「グローカリゼーション」という言葉を使用させるようになっていきます。何人もの人が書

いていることですが、この言葉は、「一つの人類社会を建設する」という進行中の作業における「世界」と「地域」との永続的・構造的な相互関係を、うまく表現しているのです。

池田・ペッチェイ両氏がそれぞれの思想を發展させたのは、人類がまだ二極化の世界に住んでいた七〇年代・八〇年代でしたから、核軍備とその脅威の問題が真剣に強調されています。世界の支配権がアメリカとソ連の二大国で分けられていた時代にあつて、両者が軍備縮小を議論の中心にすえたのは理解できます。現在、ソ連はもはやありませんが、ロシアと米国の核兵器備蓄は現実であり、これらの兵器の管理は世界全体にとって重大な、安全と生存に関わる課題です。

自然を飽くことなく貪る強欲な姿勢、地球資源の無分別な浪費、そして環境汚染は、両氏がかねてから警告していた環境上の大惨事をもたらす要因です。発刊から四半世紀以上を過ぎた今日でも、私たちは同様の危惧をもち、気候変動について議

論し、自然資源と人類の故郷・地球に対するこの無責任さがいつまで続くのかと自問しています。

熱帯雨林の破壊、有毒ガス排出、有害廃棄物による汚染など、世界的な技術革新の裏面が、近い将来、地球を「とても住めない場所」にしてしまうおそれがあります。四半世紀以上も前の問いは、今なお切実であり、その答えはまだ見つからないのです。この意味において、両氏が未来の世代に向けて発信したアイデア、提案、警鐘は、私たちが真剣に耳を傾け、熟考し、迅速に行動を起こすよう求めているのです。ペッチェイ氏が言うように、人類は技術發展の頂上に立っているにもかかわらず、ここまで生存を脅かされたことはかつてないのであり、まさにその技術發展こそが破壊の危機をもたらしているのです。技術の發展をコントロールする力を人類がもっていないからです。私たちの文明は約三世紀間、啓蒙主義による理性信仰、合理的知識、各分野の学問をはぐくんできました。それらは人間の知性の力を示してい

ます。しかし、私たちが私たち自身の力を統御できるほど十分に知的であるかどうか、それは容易には答えられない難問ではないかと思ひます。

今、簡単に紹介した二つの対談集は、世界の方針としての「グローバリゼーション」というものが形成され、議論され、段階的に導入されていく過程を振り返らせてくれます。この概念は、二十世紀の八〇年代から九〇年代初めには、主に国際関係論、地政学、現代哲学や政治学等の研究者によって使用されてきました。しかし今日では、もはや日常語です。私たちは、数十年前に考案されたところの現実に、つまり文字通りグローバル化された世界に住んでいるのです。最近では、グローバルリズムを批判する人は、それを支持する人と同じくらいいます。「世界は変化なしには発展しない」とは、はつきりわかっているものの、選んだ方向が正しいのかどうか、私たちは自問しているのです。

現代人は、多くのものを目撃しました。(旧ユー

ゴ紛争での)ベオグラード爆撃。9・11事件と、それに続いての奇妙な「対テロ戦争」。イラク戦争という現実の戦争。消費者のためという仮面の下での経済戦争。そして、質的には問題があつても、市場に受け入れられやすく、強力な浸透力をもつマスカルチャー。これらを目の当たりにしてきた現代人は、自由意志の社会という見かけの裏には、覇権や世界支配を求める超大国の野望が隠されているのではないかと、ますます疑いを強めているのです。

最近のバルカン地域における出来事、すなわち国境線の変更、セルビアの政府と民衆の意思に逆らつてのコソボの独立宣言は、「なぜ世界の一体化が、各地域の分裂と同時進行しているのか」という疑問を起こさせます。世界のあらゆる地域のナショナリズムの復興を、どうすれば適切に説明できるでしょうか。経済、政治、文化等、あらゆる局面でのこのダブルスタンダード(二重の基準)によつて、グローバリゼーションの試みは、「ア

イデアは良かったのだが、現実との溝は大きかった」と証明する「失敗した実験」がまたひとつ増えただけ——という結果になってしまいかもしれません。

現代世界は、異なった考え方、価値の見直し、そして対話に対して開かれています。このような状況において、二つの対談集は高い知的価値をもっています。そこでは、あまり知られていないヨーロッパの史実とともに、日本の、さらには東洋諸国一般の伝統、生活様式と考え方、宗教的信条について豊富な知識が示されています。池田氏の博学のおかげで、また氏独自の精神世界と仏教的見方を通して、日本人の日常生活の諸側面が、それらになじみのない読者にとっても分かりやすく、簡明に表現されています。池田氏には、世界で最も古い国のひとつ日本で幾世紀も蓄積されてきた経験に基づく見識があり、自身の宗教的認識から得た智慧があり、心の調和を達成したゆえの明澄な精神があります。それらが氏を比類なき対

話者とし、ヨーロッパ人にとっては神秘的な内的集中力を、また、ものの見かけを超えて本質を見抜く力を与えたのです。対談集で取り上げられた諸問題に対する池田氏のこうしたアプローチのために、氏の主張には一貫性と説得力があります。

ジューロヴァ対談——グローバル化に 抗する民族文化の価値

これまで述べたことを考えると、三冊目の対談集『獅子の魂』は、現代世界の運命についての議論に関して、二つの対談集とは違った位置を占めています。これは何も、ブルガリアの著名な学者が対談に参加しているからというだけではありません。この「栄光ある世界的連なり」（訳注…一連の対談集）の中にブルガリア人の名前が書かれていることは、もちろん誇りです。しかし、それだけではなく、池田・ジューロヴァ対談は、「市場システムに服従している現代世界」における人間的価値の復興であり、精神性と人間性の復興なので



池田SGI会長は1981年、ブルガリアを訪問（5月20日～25日）。ソフィア大学では「東西融合の緑野を求めて」と題して講演した（5月21日）

す。彼女は、こまやかな感覚と洗練された審美眼をもち、一貫して活動的な民間人として生き抜いてこられました。それは家庭環境と自身の信念のたまものでした。この事実ゆえに、池田氏は——氏は文化人・宗教者であり、美を愛し、我が国を含む多くの国で写真

す。さらには、ブルガリア文化の珠玉の富と伝統と傑出した功績を見事に紹介した対話でもあります。

ジュロヴァ博士について、ブルガリアの読者に紹介する必要はないでしょう。長年ソフィア大学

の教授を務め、同大学附属イワン・ドゥイチエフ記念スラヴ・ビザンツ研究所センター長、セルビア科学芸術アカデミー国際会員等を歴任し、創価大学の名誉博士でもあるジュロヴァ博士は、博学であり、芸術・文化史のみならず現代芸術の分野にも精通されています。

展を開いてきた精力的な写真家でもあります——ブルガリアに関する対談の相手にジュロヴァ博士を選んだのでしょうか。

両著者が表明している共通の目標は、人類の文化史において「小民族」とか「大民族」の区別などないという明確な認識をもつて、「小さな国」の文化を紹介することです。対談集の中心思想は「変化し続ける世界の中で、すべての文化伝統は尊重され、しかるべき地位を与えられるべきである。なぜなら、これが国のアイデンティティの基礎になるからだ」というものです。異なる伝統の個性が奪われ、多様な精神性がひとつに統一されてしまうならば、それは世界にもたらされる可能性の中でも、最も悲劇的な災いであり、対談の中で両者はこの傾向に断固として反対しています。

池田氏は、日本とブルガリアはシルクロードの両端に位置しているからこそ、その気になれば、相互に理解し合えるのだと述べています。池田氏

が繰り返し述べているように、シルクロードはその道筋に存在する国々を分断するのではなく、結びつけるのであり、思想、知識、技術、芸術作品の交流を可能とする媒介なのです。前述したように、『獅子の魂』において、「シルクロード」は「常に変化しつつ、一体化する世界」の素晴らしい象徴です。とはいえ、この対談で最も重要なのは、「精神性、人間性そして美が支配する世界」を描き出している点なのです。

『獅子の魂』の対談は九九年に終了し、同年、日本語で出版されました。同書は大きな関心を集め、早くも翌年には第二刷が出されました。

読者がこの対談集に出あったのは、（訳注…冷戦後の世界という）変革の時代でした。本書の中で、ジュロヴァ博士はこのテーマについて、ブルガリアの経験をもとに何度も語っています。彼女は、変革期の社会的な代償や、ヨーロッパの地図を塗りかえた過程の正負の両面を述べています。今日、ブルガリアがEUの一員となり、少しずつにせよ

経験を積み始めたときから見れば、本対談集の理念と論点は、その時代を追い越していたと判断できます。市場原理というものが、文化や芸術というデリケートな分野に、そして教育と福祉という生活に不可欠の分野に、どれほど大きな影響をおよぼすか。今や、われわれ自身の経験によって検証できるのです。

『獅子の魂』は、危機感をあらわにしたトーンが、ところどころにあるにもかかわらず、全体として樂觀的な書物となっています。本書は、ブルガリアと日本の幾世紀にもおよぶ文化史の実例を通して、民衆は時代の気まぐれよりも強いということ、確信をもって示しています。『小さな』国と民族が身につけている生き残るための智慧、そして彼らの魂の力（『獅子』との類比は、ブルガリアにとっても日本にとっても偶然ではありません）は、彼らの未来を保障するものです。本書のメッセージは、「未来世代の人々は、彼らの民族的・文化的な価値を護るための力と勇氣、そしてなにより智

慧を、自らの内に見出すだろう」ということです。このメッセージは、両者が表明している未来への憂慮にも関わらず、前向きな色あいを本書に与えています。二十一世紀のブルガリアと日本について考察している章において、両者が、『新世界秩序』のもとでの将来の発展についての懸念を、最初に表明していることは偶然ではありません。ジュロヴァ博士にとって、バルカン地域の核心的問題は民族同士の差異であり、これが他国の地政学的な利害に煽動されて武力紛争を引き起こすのです。彼女は、この民族的な緊張を克服する方向にこそ、まさにブルガリアの使命があるとみています。しかし、彼女が記しているように、こうした諸外国の利害関係は、『平和の押しつけ』という政策や、『主権の制限』さらには『保護国』という結果まで生み出します。最近のコソボ独立は、彼女の見解を裏づける実例なのです。

『獅子の魂』は、二つの主要な問題を提起しています。第一の問題は、世界がグローバル構造へ

転換するための代償が高すぎはしないかという点です。第二は、〴〵何をしても許され〴〵何に対しても代価を払う〴〵という消費社会の自由主義から、どうやって精神性を守るかという点です。九〇年代のグローバル世界の設計者たちの楽観主義は、今日からみると、かなり強引なものであり、人によつては〴〵超現実的〴〵だったとさえ言えます。それにもかかわらず、グローバル世界への移行プロセスを、それを批判する人も支持する人も一様に「現実」として認めています。そして、このまぎれもない現実の中で、いにしえからの人間的な価値——伝統的な価値と聞こえるかもしれませんが——へと戻る可能性を私たちは見つけなければならぬのです。

「ポスト〴〵社会」ではなく

もっと建設的な指標を

二十一世紀は劇的な幕をあけ、地球の多くの場所が緊張と紛争の「ホットポイント」を生み出し

ています。この新世紀に人類がどういう方向へと進むのか。それを予知するのは難しいことです。おそらく私たちは、二十世紀末からの「一つの世界へと向かう動き」に「新たな意味」を与える途上にあるのでしょうか。私たちは、「何かの終わりを意味する」ポスト社会」、すなわちポスト工業化、ポスト資本主義、ポストモダン、そして最近ではポスト悲観主義といった社会に、いつまでも生きているわけにはいかないという事実を知らねばなりません。人類の知的エネルギーを建設的な方向へ向けるべき時は、とつて来ているのです。もっと人間的な世界をつくるモデルとなる「何かの始まりを示す」プレ社会」へと舵を切るべき時は、すでに来ているのです。

この転換が、グローバル主義の負の側面を中和することによってなされるのか、伝統的な諸文化に戻ることにによってなされるのか、全人類的な宗教の創出によって、あるいは宗教的共同体がエコロジー運動をすることによって実現するのか、予

測は困難です。なぜなら、世界はあまりにも多様であり、矛盾だらけだからです。

しかし、ひとつだけ確かなことがあります。建設的な方向を選択するためには、人間的な原則を守るためには、*「生への選択」*をするためには、勇気だけでなく、義務と責任の自覚が必要だということです。

この意味において、三つの対談集は多くのことを読者に語ってくれます。そして、これらの書をお定まりの教訓としてではなく、思索と、ものごとの見直しの、さらには議論のきっかけにしたいくならば、著者と出版社そして何らかの協力をされたすべての方々の努力は報われると、私は固く信ずるのです。

(Vassja Velinova / ソフィア大学准教授)

(訳・にのみや ゆみ / 東洋哲学研究所研究員)